

## <小学校社会>

# 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり

## ～社会科における発問の工夫を通して～

宜野湾市立はごろも小学校 教諭 川上 琢哉

### I テーマ設定の理由

今、私たちの身の回りには、地球規模の環境問題、新型コロナウイルスの世界的流行、生産年齢人口の減少における急激な少子高齢化の進行や、人工知能（AI）の飛躍的な進化、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代へと進んでいる。今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、世界は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想されている。

このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、知識の概念的な理解を実現し、情報を見極め、それらを再構成するなどして新たな価値につなげたり、複雑な状況変化の中で目的を再構築したりする力を育成することが求められている（中央教育審議会 2021:p.3）。

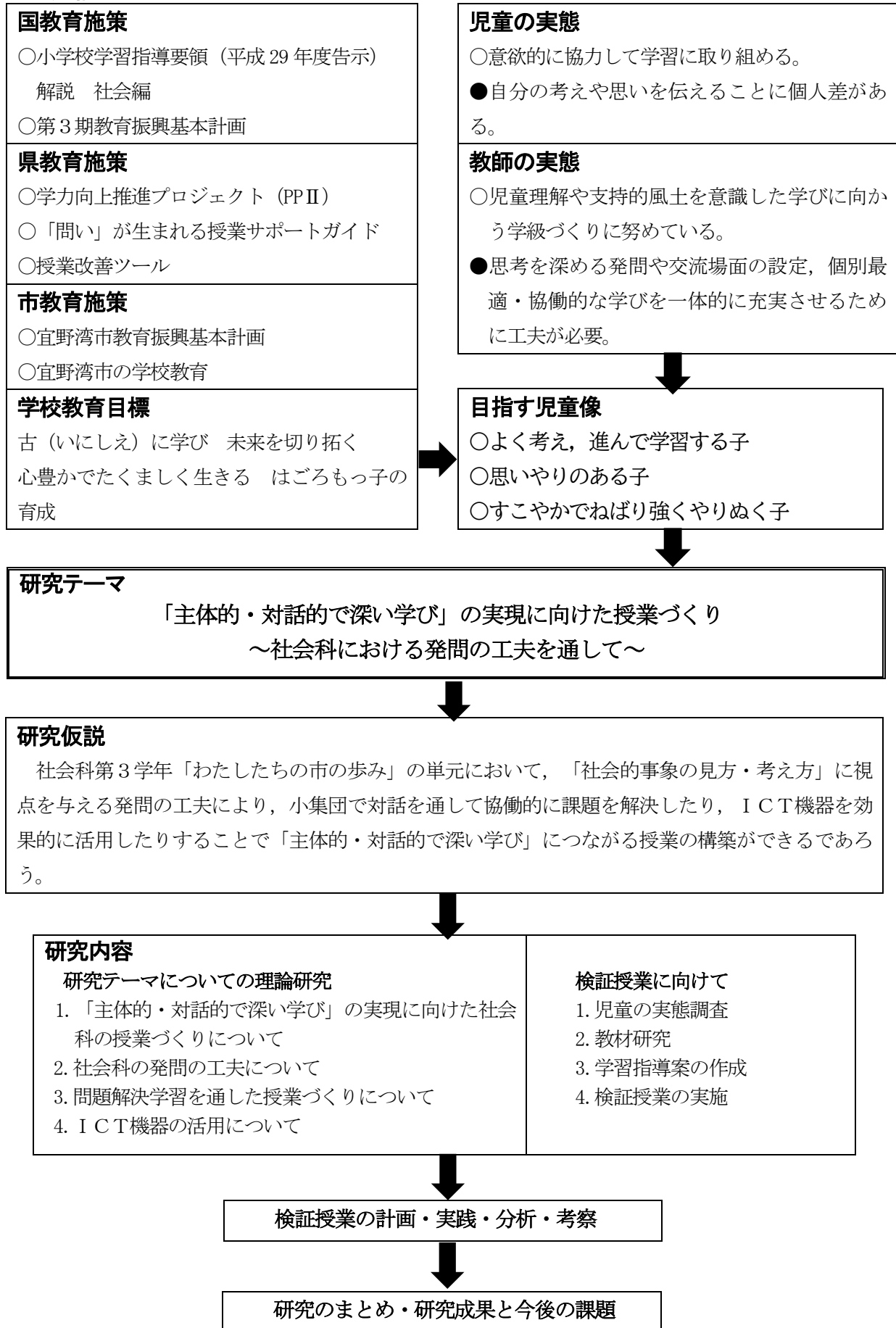
また、文部科学省（2018）「小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説社会編」（以下、学習指導要領解説社会編）では「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる」（学習指導要領解説社会編:p.3）と明記されている。

小学校社会科ではこれまで、地域にある素材を教材化したり、地域に学習の場を設けたりと、地域の実態や特質を生かした学習が工夫されてきた。さらに、近年では、インターネットや電子黒板、1人1台端末を活用して、画像や動画・学習関連ソフト等の多種多様な学習教材を日常的な学習の中で生かしていくこと、またそれらの基本的操作を習得すること等が求められている。

それらを踏まえ、これからの社会科教育では、地域の地理的環境や特性を生かし、ICT機器の効果的な活用を図りながら、「どのような視点で物事を捉え思考していくのか」という社会科ならではの「社会的な見方・考え方」に視点を当てた発問の工夫や、それらを用いた考察、構想や説明、議論等の学習活動が組み込まれた問題解決型の学習方法等を、学習状況や児童の実態に応じて効果的に組み合わせる必要があると考える。

そこで本研究では、社会科における「社会的な見方・考え方」に視点を当てた発問の工夫を通して、児童の主体性を重視した探究的な学習や体験活動を行うとともに、児童同士あるいは多様な他者と協働的に関わり合いながら、一人ひとりの学習ニーズに応じた柔軟な指導を計画的に行うことで「主体的・対話的で深い学び」の実現に迫ることができると考え、本テーマを設定した。

## II 研究構想図



### Ⅲ 研究内容

#### 1 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた社会科の授業づくりについて

##### (1) 「主体的・対話的で深い学び」とは

現在の学校教育において、思考力・判断力・表現力等の育成、学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力や習慣の形成等、様々な課題が挙げられている。それを受け、これまでの学校教育の良さを生かしながら、学習の質を高めていくために、文部科学省『小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 社会科編』（以下、学習指導要領解説社会編）においても、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進している。（学習指導要領解説社会編 p.3）さらに、文部科学省は中央教育審議会の教育課程部会において「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」のそれぞれの視点のイメージとして、図1のように示している。

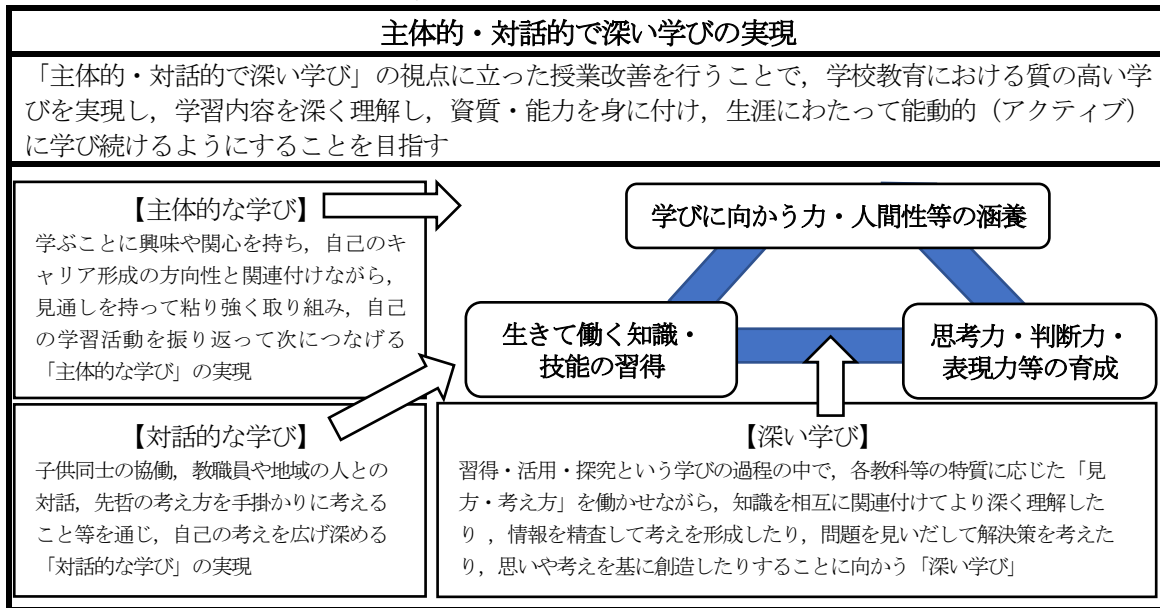


図1 『主体的・対話的で深い学びの実現に向けて』 文部科学省を参考に筆者作成

このように、これからの学校教育に求められる「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりにおいて、3つの「学び」のそれぞれの特性を相互に関連付け、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」、「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」を、バランスよく育んでいくことが重要だと考える。

##### (2) これからの社会科の授業づくりとは

学習指導要領解説社会編には、小学校社会科の教科の目標を、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を養う」（学習指導要領解説社会編:p.17）としている。

社会的な見方・考え方（小学校においては「社会的事象の見方・考え方」と表記している）とは、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して（視点）社会的事象を捉えることであり、それを基に比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすることが授業改善として求められている。これからの社会科の授業づくりでは、これらの社会的事象の見方・考え方を基に視点を与え、児童が深く学び合うための工夫を行っていくとともに、地域の関係機関との連携・協力を通して、児童の主体性を重視した探究的な学習や体験活動を計画的・効果的に行っていくことで「主体的・対話的な深い学び」へと繋げていくことが重要だと考える。

## 2 社会科の発問の工夫について

### (1) 社会科における発問の歴史をふり返る

発問については、これまでの教師生活において日々熟考を重ねてきたが、課題が尽きることはなかった。歴史的に見ても、発問について追究し類型化するなどして、発問の構造的な研究がされてきた。宮坂(1970)は『教授学研究』の中で斎藤喜博の島小の実践を分析しながら「質問」と「発問」を区別した。(宮坂 1970:p. 40) 吉本(1974)は『訓育的教授の理論』の中で限定発問(しぼる問いかけ)、否定発問(ゆさぶる問いかけ)、関連的発問(広げる問いかけ)という3つの類型をあげた。(吉本 1974:p. 144) 山崎(1976)はゆさぶり発問について「平板な社会科授業の脱皮を可能にする、社会科授業の改善ができる」(山崎 1976:p. 34)と主張している。

1980年代になって、社会科教育において発問は大きく取り上げられ、特に重視されたのが「発問・指示」である。二杉(1987)は、「発問の分析も大切である」の中で「『子どもの考えるべき内容を示す機能』としてとらえたものが発問であり、『子どもが考える形態を示す機能』としてとらえたものが指示である」(二杉 1987:p. 26)とし、「指示」と「発問」を指導言の二つの機能として捉えている。

1989年には生活科、1998年には総合的な学習の時間が導入され、「指導より支援」の方が強く言われるようになったが、学習者研究が進み、子供の「学び方」に焦点があたるようになってくると、そのような中で発問のみを研究するということは、教師の一方的な説明による一斉指導を前提とする古い授業観をそのまま踏襲することにもなりかねないと懸念される考えもあった。

しかし、現在の学校現場において発問への懸念よりも重要性の方が高まっていると考える。近年、GIGA スクール構想が進み、子供たちは1人1台端末を使用するようになり、学習活動もより多様化しているが、何を目的にそれらを使用するのか、それらを使って何を学ぶのかを教師は発問によって具体的に示していかなければならないからである。やはり教師の仕事はしっかり教えることであり、各教科の「見方・考え方」に視点を与える発問を工夫することで、質の高い授業をつくりだすことへと繋がるのではないか。発問の重要性については、今後もますます高まっていくと考えられる。

### (2) 社会的事象の見方・考え方を深める「発問」とは

発問とは、学習過程やそれに伴う教材、子供たちを取り巻く社会環境や経験、興味・関心、発達段階等を考慮し、学習課題を解決していくために教師が子供たちへ働きかけるものである。この発問を行えば、必ず課題解決するという絶対的な発問は存在しない。教師は、目の前の子供たちの状況や学習環境に合わせて発問を考えていく必要がある。さらに、社会的な見方・考え方を深める発問の意義から考えると、社会科の内容となる社会的な事象の特色や意味を考えさせながら、「どのような視点で物事を捉え思考していくのか」(学習指導要領解説社会編 p. 4)という社会科ならではの「社会的事象の見方・考え方」に視点を当てた発問の工夫が必要になる。

そのために、基本的な発問の仕組みから考えていく。大西(1988)は、図2のように、意図をもって教師が発する音声言語を「指導言」と呼び、大きく発問、説明、指示に分類化して構成している。

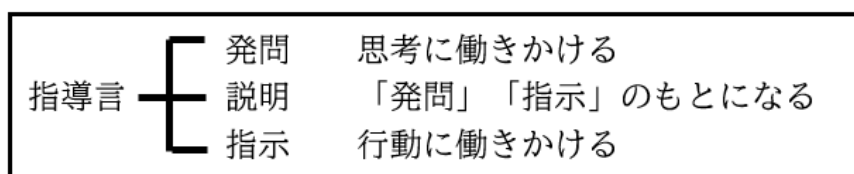


図2 指導言 大西(1988)を参考に筆者作成

授業の中で「発問」「説明」「指示」が行われるが、「発問」は子供の思考に働きかけ、「指示」は子供の行動に働きかける。授業では、「発問」と「指示」をセットで行うことで子供が思考した後何をするにしろよいか迷わないようにする工夫や、「発問」「説明」「指示」が補完的にバランスよく行われる必要があると考える。

発問の仕組みについてより深く見ていくと、豊田（1984）は、発問構成において、発問の組織化という観点から表1のように3つを取り上げている。

**表1 発問の組織化 豊田久亀(1984)p.98を参考に筆者作成**

類型	発問の組織化
論理的な組織化	前後の発問や、説明・指示と矛盾しないように発問を組織すること
科学的な組織化	教科・教材の論理に即して発問を組織すること
心理的な組織化	子どもたちの過去経験や興味・関心、能力等を合わせて発問を組織すること

豊田が指摘した、一連の授業の中での全体的な流れに合わせた発問を組織すること（論理的な組織化）、教科目標や教材に即して発問を組織すること（科学的な組織化）、働きかける対象である子どもの実態を捉えて発問を組織すること（心理的な組織化）の3つを、授業の中でどのように計画的・効果的に組み合わせていくかが重要であると考え。また、宗實（2021）は表2のように、吉本（1974）や有田（1988）の考えを参考に、発問を3つに分類している。

**表2 発問の分類 宗實(2021)p.21を参考に筆者作成**

絞る発問 (思考の焦点化)	視点を絞りたいときに用いる	「だれが」「どこで」「いつ」等、人や場所、時間などに絞って問う際の発問
広げる発問 (思考の拡散)	視点を広げたいときに用いる	「どのように」と様子や方法を問い、追究させる際の発問
深める発問 (思考の深化)	思考を深めたいときに用いる (ゆさぶり)	「なぜ」と因果関係を問う際、その他一般化を図る際、多面化・多角化を促す際の発問

このように類型化された発問を、授業過程のどの学習段階でどのように組み合わせ活用していくのかを考えることが重要になってくる。

さらに、表3のように、社会的事象の見方・考え方を働かせるためには「位置や空間的な広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」に着目して発問を行う必要がある。それによって子供たちが獲得できる知識が変わってくるからである。発問と獲得できる知識の関係性を把握し、発問を計画的に使用することが重要だと考える。

**表3 発問の分類 澤井陽介・加藤寿朗編著(2017)p.44を参考に筆者作成**

類型	社会的な見方（視点）			獲得できる知識
	位置や空間的な広がり	時期や時間の経過	事象や人々の相互関係	
知るための問い When, Where, Who, What, How	どこで 広がったのか  どのように広がっているのか	何が変わったのか  どのように変わっているのか	だれが生産しているのか  どのような工夫があるのか	事実的知識
分かるための問い Why, (How, What)	なぜ この場所に広がっているのか	なぜ 変わっているのか	なぜ 協力することが必要なのか	概念的知識
関わるための問い Which	さらに この場所に広げるべきだろうか	どのように 変わっていくべきなのだろうか	共に協力する上で AとBとどちらが必要だろうか	価値的・ 判断的知識

発問を心理的組織化という観点から考えると、子供たちの心理面に働きかける発問の重要性が見えてくる。子供たちの心理的葛藤を促す問いである「ゆさぶり発問」については、前述の「(2) 社会科における発問の歴史をふり返る」でも少し触れたが、山崎 (1976) は、「子どもの常識的な解釈や集中、緊張の欠けた平板な授業展開に、問題を投げかけ、授業の中に変化をもたらし、緊張関係をつくり出す教師の意図的な働きかけである」「子どもたちの平板で皮相的な知識や考え方に、変革と飛躍をうながす働きかけである」(山崎 1976:p.20) と述べている。つまり、「ゆさぶり発問」は子供たちに理解の仕方や解釈の捉え方の弱さや不十分さを気づかせ、より高い次元へ発展させていくものであり、子供の思考を活性化させ、学習内容の捉え方がより豊かになるような授業構成にできる可能性を秘めていると考えることができる。

**表4 発問の共有化を促す方法 宗實(2021)p.30 を参考に筆者作成**

類型	発問の共有化の例
再生	「〇〇さんが言ったことをもう一度言える人？」 「〇〇さんがとっても大切なことを言ってくれました。〇〇さんの発言の大切な部分を隣の人と伝え合ってください。」
継続	「今、〇〇さんが『～だけど』と言いましたが、〇〇さんがその続きにどんなことを言おうとしているか予想できる人？」
暗示	「〇〇さんがよいことに気づいています。今から〇〇さんにヒントを出してもらいます」
解釈	「今、〇〇さんが～と言った意味がわかりますか？」

さらに、理解力の優れた一部の子供中心の授業にならないようにするために、共有化を促す発問を行うことも大切である。宗實 (2021) は表4のように、「『再生』『継続』『暗示』『解釈』のそれぞれの発問の良さを生かし、知識や思考の共有化を図ることで、理解のゆっくりな子は、他の子の考えを聴きながら理解を進めることができ、理解の早い子は、他の子へ考えを伝えることでより深い理解につながるができる」(宗實 2021:p.30) と説いている。つまり、発問の共有化を図ることで、支持的・協働的な深い学びが学級全体へと繋がっていくのだと考える。

これらから、「社会的事象の見方・考え方」に視点を当てた発問の工夫を行うとともに、それぞれの発問の特性や効果をうまく生かしながら、授業の中でバランスよく組み合わせ意図的・計画的に活用していくことが重要だと考える。また、発問は教育内容への深い洞察と理解が前提となっており、その意味では、教材研究段階での教師の「社会的な見方・考え方」が重要である。

### 3 問題解決学習を通じた授業づくりについて

#### (1) 問題解決学習とは

問題解決学習とは一般に学習者が自らの問題意識に即して学習問題を捉え、それに主体的に取り組み、科学的思考を働かせてその解決の方法を探究するように自発的諸活動を組織する学習指導をいう。広い意味では、発見学習・課題解決学習・探究学習なども含み、経験単元学習とほぼ同じ意味でも用いられるものである。

社会科の授業において、これまで課題に感じてきたことは、資料の読み取りをクラス全体で行うことに終始する授業が多いということである。表やグラフ等の意味を一斉に考えるだけの授業では、深い学びを体得したとは言えないと考える。問題に対し一部の児童が答えることで授業が進行し、その他大勢の児童の考えを引き上げることが難しいからである。授業の中で、意図的・計画的に小集団による問題解決学習を取り入れ、児童一人ひとりが主体的・対話的で深い学びを得られるようにする工夫が必要だと考える。

『小学校学習指導要領解説社会科編 (平成二十九年告示)』の各学年の目標において、「社会的事象の見方・考え方を働かせ、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の通り資質・能力を育成

することを旨とする」(小学校学習指導要領解説社会科:p.24)とあることから、社会科の学習の中で問題解決学習は非常に重要視されていることが伺える。単元の学習計画の中に問題解決学習を位置づける意義について、富山(2016)は表5のように、以下の3つ視点を取り上げて整理している。

**表5 単元に問題解決学習を位置づける意義 富山(2016)p.10を参考に筆者作成**

視点1	第1は、思考力・判断力・表現力を育成するためである。知識・技能は必要なものであるが、活動と切り離して注入的に指導するだけでは思考・判断・表現につながらず、結果的に定着することはない。
視点2	第2は、自分の考えの形成を促し、交流や協働の場面をつくり出すためである。問題解決の方法は1つとは限らない。個々の生徒が考えた方法を交流することでいっそう明確にしたり、考えを出し合ってグループで課題を解決したりすることが、自分自身の考えを深めることにもつながる。
視点3	第3は、「視点1」とも関連するが、日常生活・社会生活につなげるためである。日常生活・社会生活は大小の問題解決の連続である。特に変化の激しい現代社会では、正解が準備されていない問題が次々と発現する。それを解決するためには、知識・技能・思考力・判断力・表現力とともに、集中力や粘り強さも必要となる。これらを総合的に育成するためには、問題解決的な学習が不可欠である

これらから、問題解決学習を計画的に取り入れることは、児童の思考力・判断力・表現力を育み、社会生活へと繋がりのある深い学びとするために必要な学習法の一つだと考える。

## (2) 問題解決学習を効果的に活用するためには

問題解決学習を授業で取り入れる意義について前述したが、その本質について藤井(2010)は、「問題解決学習は、子どもたちの協同的な学びとして展開され、学習指導と生活指導とを統一的に行うための指導法である。(中略)学校の教師の第一の役割は、子どもたちが豊かに育つような仲間関係を学級に構築していくことにある。子どもたちは、仲間との間に肯定的で支援的な関係性を実感することにより、自分の存在について素直な自信、また、仲間へ貢献できる自分になるという意欲を持つ。そのようにして、自らの生活を整え、様々な課題に立ち向かい、また、友だちを認めて共に高まり合おうと励まし合い、努力する。だから、学力も生活力も安定し、しっかりとしたものになるのである」と述べている。(藤井 2010:p.3)

筆者がこれまで受け持ってきた学級においても、各教科の様々な学習の場面で問題解決学習を行ってきた。その中で、子供たちは支え合いながら自らの考えや思いを言葉で表現し、切磋琢磨しながら学び合っていた。もちろん、それを支える学級指導や学級全体の支持的風土の醸成等は必要である。また、毎時間問題解決学習を行えばよいというわけではない。どの単元で何をねらいとして実施するのか見通しを持ち、計画的に学習問題を立てることや、児童自ら話し合いたい、答えを見出したいと思えるような視点の与え方も重要である。

これらから、問題解決学習とは、学級の子供たちの間に、温かく支持的なコミュニケーションの成り立つ仲間関係を構築し、子供たちが主体的・対話的に学び合い、高まり合う集団に育てていくことを目指すことができる効果的な指導法の一つであると考えられる。

## 4 ICT機器の活用について

### (1) ICT機器の教育的可能性

インターネットやスマートフォンの普及により、近年、社会は大きく変化してきた。情報化の波

は国境を越え、時間や場所を超えて世界的なつながりを見せている。そのような時代背景から、内閣府は我が国が目指すべき未来社会の姿として Society5.0 を提唱した。Society5.0 では、IoT（モノのインターネット）で人とモノとがつながり、膨大な知識や情報が共有化され、これまでになかった新しい価値を創造し、人が行う能力を超えた作業を行うことで、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などのあらゆる社会問題を解決し、一人ひとりが快適で活躍する社会をめざすとされている。これから到来するそのような新しい時代に対応した人材の育成が、教育の今後の大きな役割になっていくと考えられる。

そのような時代背景を受けて、政府はGIGA スクール構想(2020)を打ち出し、全国の学校現場に「1人1台端末」の整備と、高速大容量の通信ネットワークの整備を行った。そのことにより、学びにおける時間・距離などの制約を取り払い、個別最適な学びを支援し、プロジェクト型学習を通じて創造を育む教育を行っていくことが実現可能となる。Society5.0 の目指す日本の希望ある未来に向けて、教育が変わる。そのような教育的可能性を実現するために、ICT機器の機能や特性、学習内容との適合性等を見極めて積極的に活用していくことが、これからの教師に求められていると考える。

## (2) ICT機器の効果的活用に向けて

前述のように、Society5.0 時代を迎える近年の情報化社会において、教育現場ではインターネットを活用した多種多様な学びが期待される一方で、情報モラルの育成や授業への活用法等、教師がICT機器を効果的に活用するための技術の習得や指導の工夫等も求められる。

では、どのようにICT機器を学習の中に組み込んでいけばよいのか。まずは、その機器にどのような機能や特性があり、どんな使い方をすれば子供たちの学習に効果的なのかを知る必要がある。現在、宜野湾市内の小・中学校において活用しているのが、Google for Education である。Google for Education は、「すべての人に、より多くの学びの機会を」という標語を掲げる教育機関向けのソリューションである。二川（2021）は、Google for Education を活用することで「子どもたちのコミュニケーションが今までと比べて劇的に変わる。（中略）スライドを作って説明をしたり、読み聞かせをドキュメントで行ったり、一緒にいなくても同じ時間を共有することができ、いつでもコミュニケーションを取ることができる。（中略）一方で、『変わっていくべきもの』と『変わらないほうがいいもの』を指南していく役割が大人にはある。『変わっていくべきもの』は、連絡帳や手紙や資料の配布、ノートなどであり、『変わらないもの』は、子どもたちのリアルなコミュニケーションや協働的に学び合う時間等である。共に対面で時間を共有するからこそ高まり、また深まっていくものである」と述べている。（二川 2021:p.19）

実際に学校現場では1人1台端末の積極的な活用を推進されている。しかし、ICT機器を活用することを重要視しすぎて、児童の実態や単元の学習内容からより良い活用法を見出さなければ、学習の効果は期待できない。今後、ICT機器を小学3年生の社会科の学習に活用していくために、Jamboard をシンプルに活用した問題解決学習や、カメラ機能やインターネット（動画、画像、マップ等）を活用した知識の習得、さらにはClassroom 内での教師と児童、または児童同士の交流、学びの共有化など、様々な活用法が考えられる。

このように、児童の実態や発達段階を考慮し、それぞれの教科の特質や学習内容等に応じて、ICT機器の機能や特性を生かした効果的な活用法を見出し実践し続けることが、今後も重要になってくると考える。



## IV 検証授業

### 第3学年社会科学習指導案

令和4年12月14日(水)3校時

はごろも小学校3年2組 男16人 女19人 計35人

授業者 川上 琢哉 指導助言者 白尾 裕志

#### 1 単元名

大単元4 わたしたちの市の歩み 小単元1 かわる道具とくらし 「かわってきたくらし」

#### 2 単元の目標

##### 【大単元の目標】

- ・地域の様子の移り変わりについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- ・地域の様子の移り変わりの特色や相互の関連、意味を考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会へのかかわり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。
- ・地域の様子の移り変わりについて、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う。

##### 【小単元の目標】

- ・生活の中で使われる道具の変化について、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、具体的な資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- ・生活の中で使われる道具の変化や人々の生活との関連を考える力、考えたことを表現する力を養う。
- ・学習問題を追究・解決するために、使われる道具の変化について意欲的に調べ、特色や相互の関連、意味について粘り強く考えたり、調べたことや考えたことを表現しようとしたりする主体的な学習態度を養う。

#### 3 単元について

##### (1) 教材観

宜野湾市の小学校で使用されている副読本「わたしたちの宜野湾市」では、宜野湾市立博物館内にある昔の道具やくらしの様子等が取り上げられている。本時の「かわってきたくらし」において、同じ用途の道具の変化に着目させることで、人々の暮らしの変化について考え、整理・分析ができるようにしていきたい。そのため、市立博物館から昔の道具を借用して実際に見たり触ったりする学習や、博物館見学において色々な昔の道具やくらしを体感する学習を通して、道具の変化に伴い人々の生活はどう変わってきたのかを社会的事象の見方・考え方に視点を与えながら考えていけるようにしたい。

これらを踏まえ、本校の児童の実態を考慮しながら、本市のこれまで歩んできた歴史や現況等と関連付けて指導に臨みたい。

##### (2) 児童観

###### ① 単元・教材に対する児童観

小学3年生の子供たちにとって、初めての歴史学習である。単元「市の様子」の学習において、古くから残る建造物やまち並み、外国との交流などに触れている。第1単元での学習時に参照した写真や資料なども活用するなど、本大単元と関連付けながら展開したい。

一方で、子供たちには歴史を意識する時間軸が形成されていないため、6か月前のことや自分が生まれたころ、100年前のことも、全て「昔」として一言に一括されがちである。そのため、「昔の暮らし」は、自分とかかわりのない、他人事のような昔話として捉えられやすい。それを避けるためにも、学習内容をいかに自分事として意識づけるかが肝要となる。

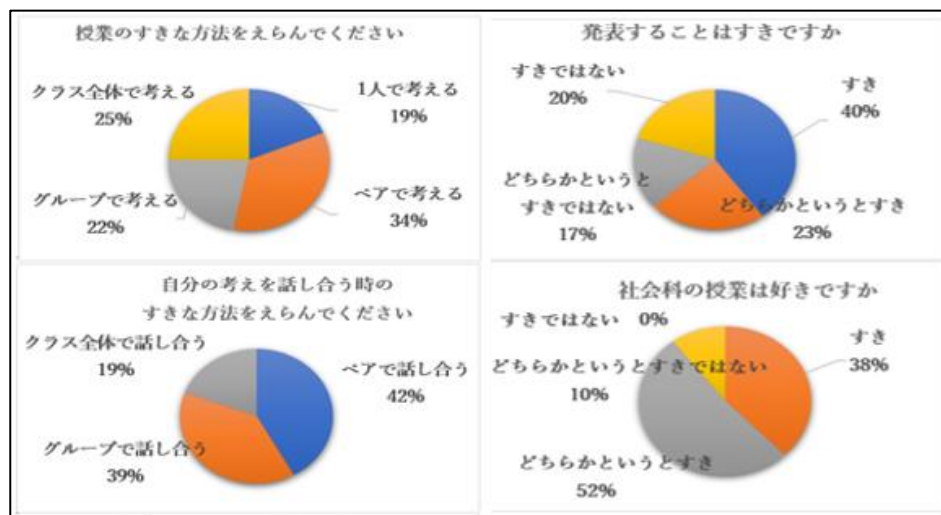
3年生の段階では、過去にさかのぼって想像することが困難だったり、認識できる時間軸の個人差も大きかったりする。学習のまとめの年表づくりの際、ある程度の時間軸を共有できるようにしたい。例えば、「50年前」と示すのではなく、「おばあさんが子供だった頃」のように身近な人物などに引きつけて年代を捉えさせるように配慮する。

## ② 児童の実態

本学級の児童は、活発で行動力があり、色々な教科の学習に積極的に取り組むことができる子が多い。外国籍の児童が多く言葉の理解が困難な場面もあるが、3年生になって初めて学習している理科・社会・総合的な学習の時間等の教科についても、友達と協力して学び合っている。

本研修に臨む際に、研修テーマに沿って児童の「主体性」や「対話」に関する内容の事前学習アンケートを実施し（図3）、児童の意欲や特性、興味のある学習やすきな学習の方法について調べることにした。「授業のすきな方法をえらんでください」という問いに対して、81%の児童が友達と一緒に学習したい、その中の56%がペアやグループの小集団で学習したいという結果であった。

図3 事前学習アンケートの結果



「発表することはすきですか」という問いに対して、肯定的な児童は63%、そうでない児童は37%という結果であった。普段活発に意見を言い合える児童が多い学級だと思っていたが、授業中に自分の考えを発表することに抵抗がある児童が約4割存在することが見えてきた。また、「自分の考えを話し合う時のすきな方法をえらんでください」という問いに対して、ペアで話し合うが42%、グループで話し合うは39%というように、クラス全体よりも小集団で話し合うことに肯定的な児童が81%いることも分かった。

さらに、その他の問い等から総合的に見ると、全体の場で自分の考えや意見を話すのは苦手だが、小集団で話すことには肯定的な児童が多いことも分かった。最後に、「社会科の授業は好きですか」という問いに対して「すき」が38%、「どちらかというときすき」は52%と肯定的な意見が90%という結果になった。その理由として、授業の導入でキーワードを押さえるために行っている「社会ビンゴ」を挙げる児童が45%、次に多かったのが、「まちのことを知れる」15%と続いた。それらから考えると、社会科の授業に対して肯定的な児童は多いが、その理由は、社会科

の授業の本質である社会的な事象について知る喜びや、学んだことを生活と結びつけて考えていくことへの楽しさ等よりも、授業の導入の際に行っているリズムに乗ったキーワードビンゴが楽しいからという児童が多いことも見えてきた。もちろん、児童の興味・関心を引き出すことは大切なことである。それらを生かしながら、社会的な事象の見方・考え方に視点を与えるような発問等を工夫したり、学習形態やICT機器を効果的に活用したりすることで、児童に「わかる喜び」を味わわせたり、学習や人生の中で「見方・考え方」を自在に働かせたりすることができるような児童の育成を目指していきたい。

### (3) 指導観

この単元では、道具という具体物を通じて「人々の生活の変化」を捉えさせる。日本社会では、戦後の高度経済成長期を通じて大きな変化を経験した。その変化をもたらしたのは、水道、電気、ガスなどの生活インフラの整備である。用途が同じ道具の変化に加え、それらに共通するものを考えさせるようにしたい。

それらを踏まえ、市立博物館との連携・協力を得ながら、実物の昔の道具を借用したり、実際に博物館を見学したりすることで、児童が昔のくらしや道具を見て、感じて、対話を通して考えることで、机上の学習のみならず、体感的に自分の生活と関連付けて理解することができるような深い学びに繋がるようにしたい。また、ICT機器を活用し、昔の道具の使い方や当時の暮らしの様子等を画像、動画を通して効果的に見せることができるようにするとともに、学習の問題を追究・解決する活動を通して、社会的な事象の見方・考え方に視点を与える発問等を工夫しながら、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて授業づくりを行っていきたい。

## 4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> <li>炊事や洗濯など家事に使用する道具や明かりや暖をとる道具など生活の中で使われた道具について、見学や聞き取り調査をして調べ、必要な情報を集め、人々の生活の様子を理解している。</li> <li>調べたことを道具カードや年表にまとめ、人々の生活の移り変わりについて理解している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>炊事や洗濯など家事に使用する道具や明かりや暖をとる道具など生活の中で使われた道具などに着目して、問いを見だし、人々の生活の様子について表現している。</li> <li>昔の道具と今の道具を比較したり、わかったことを総合したりするなどして人々の生活の様子や変化について考え表現している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人々の生活の移り変わりについて、予想や学習計画を立てたり、見直したりして、主体的に学習課題を追究し、解決しようとしている。</li> </ul>

## 5 単元の指導計画・評価計画 (全7時間)

(発)=発表・発言, (観)=行動観察, (ノ)=ノート, (テ)テスト, (端)1人1台端末, (電)電子黒板

時間	ねらい・学習活動 (◇めあて)	主な発問 [単元を貫く学習課題]	評価基準 【知識・技能】 【思考・判断・表現】 【主体的に学習に取り組む態度】

第1時	<p>【オリエンテーション】</p> <p>◇今と昔のまちの様子を比べてみよう。</p>	<p>「昔のまちの特徴を探してみよう」</p> <p>「昔のまちと今のまちを比べて、変わった所はどこですか？」</p>	<p>【思】イラストの内容を読み取り，教科書4～5ページのイラストと比較して，まちの様子の変化について考え，表現している。(発)(ノ)</p>
第2時	<p>【昔の道具】</p> <p>◇わたしたちのまわりには，どんな昔の道具があるのかな。</p>	<p>「わたしたちのまわりには，どのような昔の道具がありますか？」</p> <p>「昔の道具は，今はどうなっていますか？」</p>	<p>【思】昔の道具に触れた経験をもとに，昔の道具の使い方や，今の道具との違いについて考え，表現している。(観)</p>
第3時	<p>【学習問題をつくり，学習の見通しを立てよう】</p> <p>◇昔の道具が使われていたころは，どのような暮らしをしていたのかな。</p>	<p>「昔の道具が使われていたころは，どんな暮らしをしていたのかな？」</p> <p>【単元を貫く学習課題】</p> <p>「道具がかわることで，人々の暮らしはどのようにかわってきたのかな？」</p>	<p>【思】昔の道具が使われていたころの暮らしの様子について学習問題をつくり，表現している。(発)(ノ)</p> <p>【主】道具と人々の暮らしの変化を調べる学習問題について予想し，学習の見通しを立てて主体的に追究しようとしている。(発)(ノ)</p>
第4時	<p>【郷土資料館をたずねて】</p> <p>◇郷土資料館には，どのような道具があるのかな。</p>	<p>「昔はどんな道具を使って生活していたのかな？」</p> <p>「この道具はどんな使い方をするのかな？」</p>	<p>【知】道具を観察したり，郷土資料館の人に聞いたりして，道具の使い方や使われた時期など必要な情報を集め，絵カードにまとめている。(ノ)</p>
第5時	<p>【昔のくらしをインタビューする】</p> <p>◇家の人が子供のころは，どのようなくらしだったのかな。</p>	<p>「家の人や先生方が子供のころは，どんなくらしだったのかな？」</p>	<p>【知】祖父母や父母など家の人に，子供のころに使っていた道具や暮らしについてインタビューし，必要な情報を集めている。(観)(ノ)</p>
第6時 (本時)	<p>【かわってきたくらし】</p> <p>◇道具とともに，暮らしの様子はどのようにかわってきたのかな。</p>	<p>「道具が変わってきたことで，人々の暮らしにどんな良いことがあったと思いますか？」</p>	<p>【思】洗濯で使う道具の変化と，それに伴う暮らしの変化について整理・分析し，表現している。(発)(ノ)</p>
第7時	<p>【まとめる 道具とくらしのうつつりかわり】</p> <p>◇道具と人々の暮らしのへんかを年表にまとめよう。</p>	<p>「『かわる道具とくらし』で学習したことを，年表にまとめられるかな？」</p>	<p>【思】道具と人々の暮らしの変化について年表にまとめ，その移り変わりについて表現している。(ノ)</p>

## 6 本時の指導「かわってきたくらし」(6/7時間)

### (1) ねらい

同じ用途の道具の変化に着目し、人々の暮らしの変化について整理・分析ができるようにする。

(2) 本時の評価基準

評価の観点	思考・判断・表現
評価基準	洗濯で使う道具の変化と、それに伴う暮らしの変化について整理・分析し、表現している。
評価方法	授業内：発表・発言（グループ内，全体の場合），ふり返り，1人1台端末 授業後：ノート，1人1台端末

(3) 「めざす子どもの姿」の実現に向けた授業改善(教材・発問・問い返し・過程・工夫等)

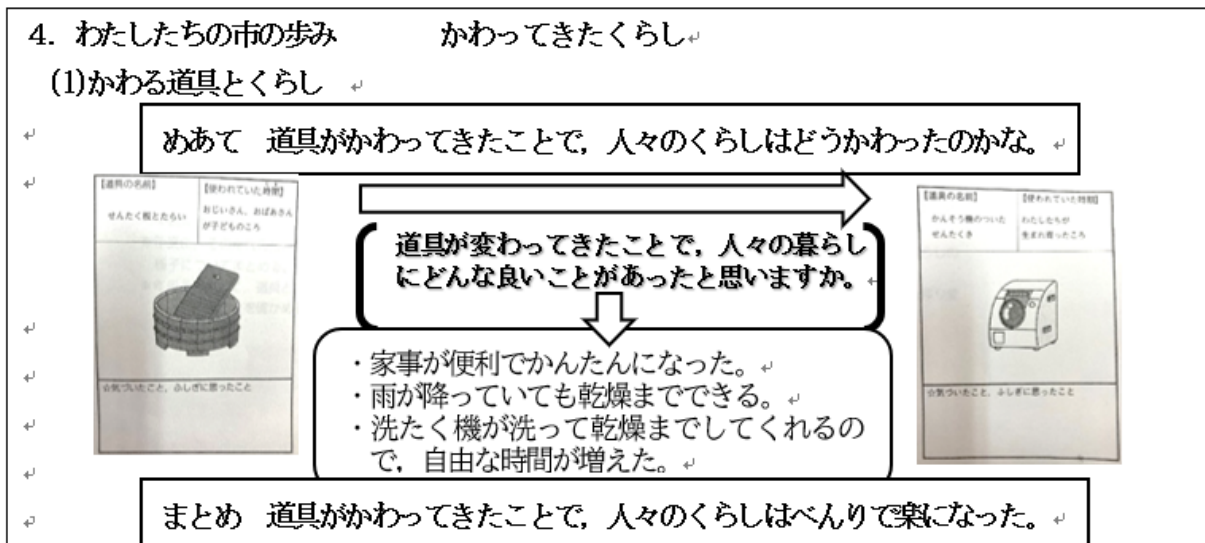
場面	工夫点（発問等）	子どもの姿
主体的に「問い」をもち、自分なりの考えをもつ		
・学習活動2の場面において、洗濯板と洗濯機の写真を提示し、今と昔の違いを考えさせる。	・「写真の女の子はどんな手順で洗たくをしていますか。」 ・「全自動洗濯機を使う人の手順はどうですか。」	写真や発問から、昔と今の洗濯の仕方や、それに伴う人々の生活の変化について気付くことができる。
他者との交流を通し、「問い」が生まれ自分の考えを広げ深める		
・学習活動3の場面において、小集団による問題解決学習を行い、主体的・対話的に学び合うようにする。	・「道具が変わってきたことで、人々の暮らしにどんな良いことがあったのかな。」 ・話し合いの視点を与える。 (例：人，時間，交通，衣食住等)	・発問や与えられた視点から、小集団で主体的に話し合い、問題を解決できる。
学びの過程を振り返り、新たな「問い」をもつ		
・学習活動6の場面において、ふり返りに視点を与えることで、昔と今の暮らしの良さについて考え、今後の生活に生かそうとする。	・「あなたは昔と今の暮らしのどちらがいいですか。それはなぜですか。」 ・「昔と今の道具と暮らしについて考えてきました。未来はどんな暮らしになるのかな。」	・昔と今の暮らしの良さについて自分の考えを持ち、これからの未来の生活に希望を持つことができる。

(4) 展開

過程	学習活動・内容・発問	予想される児童の反応	指導上の留意点，評価等
導入 5分	1. キーワードゲーム	「はがま」「洗たく板」「レコードプレーヤー」	・本単元の大事なキーワードをおさえる。(電)
	【めあて】 道具が変わってきたことで、人々の暮らしはようになったのかな。		
展開 30分	2. 昔と今の洗濯道具の写真を提示し、比較する。 (ノート)	「進化したと思う」「生活の形が変わった」	・昔と今の道具の特徴やちがいに着目させる。 (ノ)(電)
	発問①「写真の女の子はどんな手順で洗たくをしていますか。」		
	発問②「全自動洗濯機を使う人の手順はどうですか。」		・人の動きに着目させ、その違いを考えることができるようにする。

	発問③「写真の女の子が今の全自動洗濯機を見たら何と言うと思いますか。」	
	3. 道具の変化と暮らしについて考える。	「道具が変わることで、暮らしが便利になった。」
	発問④「道具が変わったことで、人々の暮らしにどんな良いことがあったのかな。」	
	4. グループの考えを全体で共有し、お互いの良さやちがいについて交流する。	「私と同じ考えや違う考えを知ることができた。」 【思】洗濯で使う道具の変化と、それに伴う暮らしの変化について整理・分析し表現している。(端)(ノ)
	発問⑤「～さんが大切なことを言ってくれました。それはどこだと思いますか。」	
ま と め 10 分	5. まとめ	「くらしがべんりになった」
	【まとめ】道具がかわってきたことで、人々のくらしはべんりで楽になった。	
	6. ふり返り	
	発問⑥あなたは昔と今のくらしのどちらがいいですか。それはなぜですか。	
	・次時の報告をする	「私は今の暮らしがいいです。便利で暮らしやすいからです。」
		・次時に見通しを立てる。

(5) 板書計画



7 検証授業研究会

(1) 授業者の反省

- 白尾先生のご助言を参考に6つの主要な発問を準備した。それらを、ICT機器を活用して「見える化」することで、発問に対して多くの児童が自分なりの考えを持つことができた。
- 本時のねらいの達成に向けて、小集団による問題解決学習の場で対話的に学び合うことで、道具の変化に伴う人々のくらしの移り変わりを主体的に整理・分析することができた。
- パワーポイント、Jamboard、Classroom等を組み合わせて活用し、キーワードゲームや発問の表示、ふり返りや学習の共有化等、深い学びを得るためにICT機器を効果的に活用することができた。

○市立博物館との連携により、昔の道具を借用したり見学や体験学習をしたりと、実物の「モノ」を見て、触って、実感する体験的な深い学びとなった。

●学習活動2の洗濯道具の比較に時間をかけ過ぎたことや、学習活動を詰め過ぎたことが原因で、授業の終末の意見の共有、まとめ、ふり返りの時間が少なく、不十分なまとめ方となった。

## (2) 指導助言

門口 安光 指導係長より

○きめ細かい単語と指示がコンパクトで聞き取りやすく、時短に繋がっている。また、ほめながら指示したり説明したりするので、子供たちが学習に対して前向きになり、クラスの雰囲気良くなる。子供たちの発言にも良さを見出していて、「これでいいんだ」と感じる声掛けだった。

○めあてや発問を「～思いますか。」と疑問形で尋ねることで、自分の考えを示しやすい発問の工夫が見られた。

○導入でキーワードゲームを行うことで、子供たちの楽しさと興味・関心を引き出していた。

○ふり返りでは、昔と今の良さについて視点を与えることで、子供たちが自分なりの考えをまとめることができていた。

●終末に時間をたっぷり取ることができると、しっかりまとめられた。

琉球大学 教職大学院 教授 白尾 裕志 氏

○学級が落ち着いていて、3年生の後期の子の成長に驚いた。語彙力もしっかりと育っている。

○助言した発問の例を上手く繋いで授業をつくっていた。

○問題解決学習（グループ学習）の際に、授業者が子供たちの良さをメモして回っていたのが良かった。あとで子供たちの多様な意見を全体で共有できる。

○ふり返りは、「あなたは昔と今のくらしのどちらがいいですか。それはなぜですか」と提示し、問いとセットで行うことで学習の再構成が行えていた。

◇道具の変化に着目して理解させるためには、着目のさせ方や見方・考え方が大切である。

◇発問1の「写真の女の子はどんな手順で洗たくをしていますか」や発問2の「全自動洗濯機を使う人の手順はどうですか」では、労働過程に視点を当てており、昔の洗濯の大変さや今の洗濯の便利さを理解させることで、発問3・4が効果的になる。

◇変化を問う時には発問3の「写真の女の子が今の全自動洗濯機を見たら何と言うと思いますか」のように「人」「モノ」に視点を与えることが必要である。

◇発問4の「道具がかわってきたことで、人々のくらしにどんな良いことがあったのかな」では、良いことを選択・判断することができる。何に着目させるかの視点が大事である。

◇キーになる子の考えや意見を大事にし、「それについてあなたはどう思う？」などと問いを全体に広げ、次に繋げることで、全員の学びへととなっていく。

●昔の洗たくの仕方を体験させる活動は良かったが、本時の前に全員で体験させるとさらに良い。そうすれば本時の時短になり、まとめの時間が多く取れる。

●タイムマネジメントの面では、1分でも超えてはいけない。授業を40分でまとめて残り5分をふり返りの時間として確保しなければならない。

●昔の道具である「たらい」も用意する必要がある。全自動洗濯機も、学校にある段ボールでいいからそれに見立てて準備する。実物の「モノ」がなければ、学習内容をイメージしにくい。



## V 仮説の検証

社会科第3学年「わたしたちの市の歩み」の単元において、「社会的事象の見方・考え方」に視点を与える発問の工夫により、小集団で対話を通して協働的に課題を解決したり、ICT機器を効果的に活用したりすることで「主体的・対話的で深い学び」につながる授業の構築ができるであろう。

本研究では、社会科における発問の工夫を通して、「『主体的・対話的な深い学び』の実現に向けた授業づくり」をテーマに研究を進めてきた。テーマを検証するにあたり、授業の様子や児童のワークシート、タブレットの記述、検証前後のアンケート等の分析をもとに検証する。（教師の発問「\_\_\_\_\_」、児童の発言「\_\_\_\_\_」）

### 1 「社会的事象の見方・考え方」に視点を与える発問の工夫について

#### (1) 授業の様子やICT機器の活用から

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、「社会的事象の見方・考え方」に視点を与える発問を何度も推敲を重ねて実践したが、児童の中には、発問を聞き逃してしまう子や聞くだけでは理解が難しく時間が掛かる子がいるという課題が見えてきた。そこで、第5時からはパワーポイントを使って主要な発問を電子黒板に表示し、写真等を加えて「見える化」し（図4）、発問に対する答えを児童が考えている間表示して、繰り返し見て考えることができるようにした。

本時の第5時では、学習目標の達成に向けて、昔と今の洗濯の違いに着目した授業を行った。「写真の女の子は、どんな手順で洗たくをしていますか」と児童に発問し、代表児童に洗濯手順を動作化し疑似体験させることで、「やることが多い」、「乾燥まで自分でやらないといけない」などの昔の洗濯の大変さを引き出すとともに（写真1）、昔と今の道具の性能や人の働きの違いを全体で共有することができた。

本時の山場となる場面では、「道具が変わってきたことで、人々の暮らしにどんな良いことがあったのかな」と問いかけ、変化の良さに視点を与えることで、道具の変化とそれに伴う人々の暮らしの移り変わりについて明確に考えるように工夫した。児童は1人1台端末でJamboardを活用し、グループで主体的・協働的に対話を通して考えていた。その後、それぞれのグループの考えを学級全体で共有化することで、多様な考え方を知ることができた。

ふり返りの場面では「あなたは昔と今の暮らしのどちらがいいですか。それはなぜですか」と問い、それをClassroomのコメント欄に書くように指示した。児童それぞれの良さを全体で共有化し、多様な見方・考え方に触れることで、学びを深めることができると考えたからである。（写真2）



図4 発問を電子黒板に提示



写真1 洗濯手順を動作化し疑似体験する児童



写真2 ふり返りの共有化



## (2) アンケート調査の結果や児童のふり返りの記述から

「社会的事象の見方・考え方」に視点を与える発問の工夫から、児童の「主体的・対話的な深い学び」にどのような変化がみられたかを下記の図5の検証前後のアンケートや授業後のふり返しから検証する。

その教科が好きだから主体的に学ぶことができるわけではないが、その教科を学びたいという意欲の面では、楽しさや自分にとって好きな教科であることは、主体的な学びに繋がることの一部だと考える。学習アンケート調査において、「社会の授業は好きですか」という問いに対して、検証前・後ともに肯定的な意見が約90%であった。しかし、学習指導案の(2)児童観でも述べたが、肯定的な理由には、授業の導入で学習キーワードを押さえることや児童の興味・関心を引き出すために行っているビンゴゲームが大多数を占め、社会的事象を知る楽しさ等を好きな理由に挙げている児童は約41%に留まった。

そこで、社会的事象の見方・考え方に視点を与える発問の工夫を行うことで、社会科の授業の本質である社会的事象についての楽しさを味わわせ、そこから児童の主体性を引き出すことで深い学びへと繋がりたいと考えた。

その結果、検証後のアンケートでは「社会のことが分かる」等の社会的事象に目を向けた内容を社会の授業が好きな理由にしている児童が約93%へと高まった。(図5)

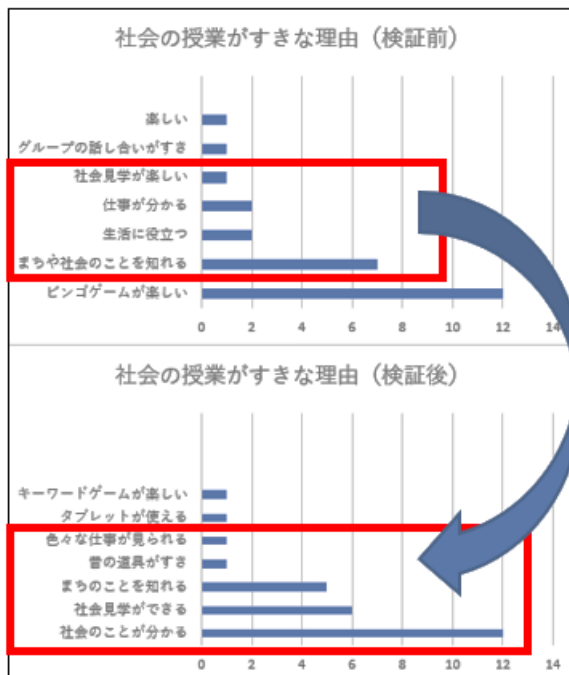


図5 社会が好きな理由  
(アンケート結果より)

これらから、「社会的事象の見方・考え方」に視点を与える発問の工夫から深いことをおもしろく考えることで、児童の興味・関心を引き出すとともに、社会的事象について考える楽しさを味わわせ、より深い学びへと繋がったと考える。

また、本単元のふり返しでは、前述のようにClassroomのコメント欄に記入させ全体で共有し、学習内容やふり返りの良さを次時へ繋げるようにすることで、分かったことや難しかったこと、次に学習したいことを書く等、社会的事象についてふり返る児童が増えた。(表6)

学習したことを素直に表現することも重要なふり返りの方法だと考えているが、第5時では、「あなたは、昔と今のくらしのどちらがいいですか。それはなぜですか」とふり返しに視点を与えた。それにより、今のくらしの便利さを再認識すると同時に、昔のくらしの特徴や昔と今のくらしの移り変わりの様子を整理・分析することにもなり、学習内容を再構成する意味でも、深い学びへ繋がる有効な手法の一つだと考える。

表6 本単元の児童のふり返し

時間	【学習名】	児童のふり返し
第1時	【昔の道具】	児童A「昔の道具は今と形がちがう。そして変化している」 児童B「昔の道具は今もあるけど、形が進化していることが分かった」
第4時	【昔のくらしをインタビューする】	児童C「昔と今のちがいが、かわらないものをインタビューできてよかった」 児童D「私が知ったことは、昔は人の力を使うということです。昔の人はすごいと思いました」
第5時	【かわってきたくらし】	児童E「私は今のくらしがいいです。それはくらしやすいからです。でも昔のくらしも楽しそうです」 児童F「私は今のくらしがいいです。それは、きかいのほうが楽しい、好きなことに時間が使えるからです」

## 2 対話を通じた協働的な問題解決学習について

### (1) 授業の様子やICT機器の活用から

本単元において、児童の主体性を引き出し、対話を通して学び合うことができるようにするために、問題解決学習の場面において、グループ（3人構成）で協働して考え、1人1台端末のJamboardにまとめた考えを書き込んで発表し、(写真3)学級全体で共有するという授業スタイルを計画的に実施した。グループを構成する際に、一人ひとりが主体的に対話できるように可能な限り3人構成にしている。これまでの授業経験の中で、4人以上だと発言できない児童が生まれるという課題があったからである。さらに、意図的にメンバーを決めず、誰とグループになっても臨機応変に協力できるように、他教科や清掃・当番活動、休み時間等においても学級の支持的な雰囲気づくりを意識し、誰とでも主体的・協働的に話し合えるような人間関係を育む学級経営を行ってきた。「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには、一つの教科のみならず、学級経営そのものが重要だと考えるからだ。

それらを生かし、第2時の単元を貫く学習課題の設定の場面においても、同様の授業スタイルで臨んだ。協働的に話し合い活動を進める中で、難しさを感じているグループには教師が介入し対応することで、みんなでひとつの学習課題を設定することができた。

第4時では、宮城校長、国吉教諭、兼久教諭、そして私の4人の子供時代について「昔のくらしをインタビューする」学習を行った。事前にインタビュー内容を決める際には、古い道具や昔のくらしに視点を当てて質問できるように指導した。校長先生にインタビューできるとあって、緊張しているグループもあれば、楽しみながら質問しているグループもいる。その後、「今と昔のちがいをたくさん見つけられるかな」という発問の下、グループで話し合い、今と昔の道具や暮らしの違いについて全体で共有化することで深い学びへと繋がった。

検証授業である第5時においても、「道具がかわってきたことで、人々のくらしにどんな良いことがあったのかな」という発問から、グループで話し合い協働的に考えをまとめた。(写真4)「道具がかわったから、楽になった。家族の時間がふえた」「道具が進化したことで、昔の道具より使い方が楽になった」等のねらいに即した考えを発表する姿が見られた。

(写真5)



写真3 Jamboardを活用する児童



写真4 協働的に学び合う様子



写真5 主体的に話し合う様子

## (2) アンケート調査の結果と児童のふり返りの記述から

学習アンケートにおいて、「自分の考えを話し合う時の好きな方法をえらんでください」という問いに対して、検証前より検証後の方が、グループで話し合いたい割合が19%増えた。(図6) 今回の単元計画の中で、グループ(3人構成)で対話を通して協働的に学び合うことで、児童の主体性を引き出し深い学びへと繋げたいという意図を踏まえ、グループ学習への肯定的な意見が増えたのは、その効果の表れだと考える。その理由についても、「分かり合える」、「考えを聞いてくれる」、「こまった時話し合える」等、それぞれのグループの個々人が対話を通して学び合う良さを感じている内容が多く見られた。また、授業後のふり返りでは、児童I「グループでちゃんと話し合えたからよかったし、JさんとKさんがちゃんと考えていたのすごいと思いました。話し合えて楽しかったです」、児童L「グループでたすけあったりして楽しかったです」等、友達との対話を通じた主体性・協働性に視点を置いた意見も多数見られた。

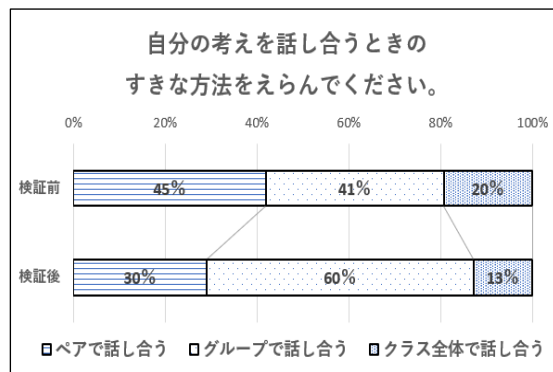


図6 話し合う時の好きな方法  
(アンケート結果より)

## 3 ICT機器の効果的な活用について

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、ICT機器を活用することは効果的な手法の一つだと考える。児童が考えた内容を全体で共有したり、さらにそこから考えを広げたりすることで深い学びへと繋がると考えるからだ。ただ、いつでもICT機器に頼ればよいわけではない。どの場面でどのように活用するかが重要である。

今回の単元では、重要語句を押さえるとともに、児童の興味・関心を引き出すことも考え、導入でキーワードゲームを行った。(写真6) その際パワーポイントを使って写真や文字を電子黒板に表示し「見える化」することで、その重要語句をイメージできるようにし、大事なことを分かりやすく楽しんで学ぶことができた。また、展開の場面でもパワーポイントを活用し、昔の道具の写真を表示することで、見たことのない道具の特徴等をイメージできるようにしたり、主要な発問を文字化して児童の考えている間表示したりすることで、発問を聞くだけでは理解が難しい児童へ配慮した。さらに、1人1台端末でJamboardを活用し、(写真7) まとめの場面では、ふり返りの内容等を学級全体で共有することで、その良さを認め合い自分と他者を比べながら、さらに社会的事象への理解を深めることができたと考える。



写真6 キーワードゲームの様子

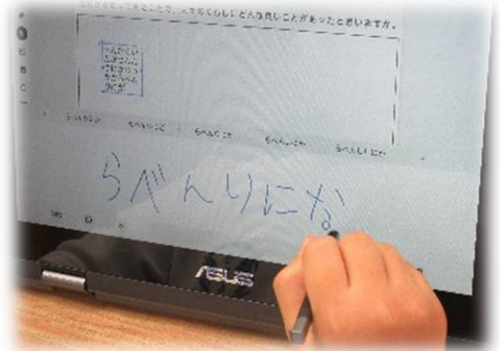


写真7 1人1台端末の活用の様子

## Ⅶ 研究の成果と今後の課題

### 1 研究の成果

- (1) 「道具が変わったことで、人々の暮らしにどんな良いことがあったのかな」の様に、「社会的事象の見方・考え方」に視点を与え、対話が生まれるような発問に工夫することで、研究テーマである「主体的・対話的な深い学び」の実現に近づけることができた。
- (2) 研究テーマに迫る一つの手立てとして、発問の工夫と問題解決学習を組み合わせることで、主体的・協働的に対話を通して課題を解決し、社会的事象について理解を深めることができた。
- (3) 地域の関係機関と連携し、実物の「モノ」を使った体験学習や実際に見て学ぶ社会見学等を積極的に行うことで、社会的事象について体感できる探究的な深い学びを実現することができた。
- (4) ICT機器を効果的に活用し、発問や学習教材等を「見える化」することで、児童の興味・関心を引き出し、持続させ、対話の活性化と社会的事象についての深い学びへと繋がった。

### 2 今後の課題と対応策

- (1) 単元を貫く学習課題を設定する際に、児童一人ひとりに主体的に問いを持たせたり、学習の必要性を感じさせたりすることができるような、発問の工夫や教材開発が必要である。
- (2) 社会的事象について深く理解することができるよう、授業の終末において学習内容をまとめたり、共有化して全体理解へと繋げたりする時間の確保や計画的なタイムマネジメントが必要である。
- (3) 学習を深めたり比較検討したりする場面において、より効果的な深い学びを実現するために、発問の工夫や児童の考えの引き出し方、教材教具の選定、準備、提示方法、そのタイミング等を意図的・計画的に構成し実施する必要がある。

### <主な参考文献>

- 中央教育審議会（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」
- 文部科学省（2018）『小学校指導要領（平成29年度告示）解説 社会編』
- 宮坂義彦（1970）『教授学研究』「発問の概念と発問分析の概念」国土社
- 吉本均（1974）『訓育的教授の理論』「発問の概念と発問分析の概念」国土社
- 山崎林平他（1976）『社会科のゆさぶり発問』明治図書
- 二杉孝司（1987）『社会科教育 No. 297』「発問の分析も大切である」明治図書
- 大西忠治（1988）『発問上達法 - 授業づくり上達法 PART 2 - 』民衆社
- 豊田久亀（1988）『明治期発問論の研究 - 授業成立の原点を探る - 』ミネルヴァ書房
- 宗實直樹（2021）『深い学びに導く社会科新発問パターン集』明治図書
- 有田和正（1988）『社会科発問の定石化』明治図書
- 澤井陽介・加藤寿朗編著（2017）『見方・考え方 [社会科編] 』東洋館出版社
- 富山哲也（2016）『主体的・協働的に学ぶ力を育てる！アクティブラーニング GUIDE BOOK』明治図書
- 藤井千春（2010）『子どもが蘇る問題解決学習の授業原理』明治図書
- 二川佳佑他（2021）『いちばんやさしい Google for Education の教本』株式会社インプレス